

各地で話題の病虫害



クローバーリーフウィービル ヒラヤマナガメゾウムシ

ニセタマナヤガ

黒あし病

黒穂病(左健全)

クローバーリーフウィービル

学名 *Hypera punctata* (Fabricius)

英名 clover leaf weevil

昭和53年9月、横浜市中区山手において、我が国未記録と思われる大型のゾウムシ数頭が採集され調査の結果、クローバーリーフウィービル(仮称)であることが判明(Watanabe 1979)した。

本種は、南ヨーロッパの原産といわれ、クローバー、アルファルファ等豆科牧草の害虫として知られている。

経過習性は、アメリカ合衆国北部の例だと、年間1世代、幼虫越冬が主であるが、卵、成虫でも越冬する。南部では2世代の場合もある。越冬幼虫は晩春土中にレース状のまゆを作り、その中で蛹化する。成虫の羽化は6-7月で、羽化直後は寄主を暴食するが、盛夏は活動がにぶり9-10月に再び活発となる。卵は20日前後でふ化する。幼虫は夜行性でクローバー等寄主の葉を食害することが明らかにされている。

本虫の調査は葉の食害痕に頼ることになるが、同様の食痕を残す数種類のゾウムシが存在するので判別には注意が必要である。

クローバーリーフウィービルは、原産地のヨーロッパでは防除を必要とするような被害がほとんどなく、アメリカ合衆国でも侵入初期に被害が問題にされた程度で、同属の *Hypera postica* (アルファルファゾウムシ、我国未侵入種) に比べると

害虫としての評価は低いようである。

横浜市内での初発見後、同市内の主要個所について神奈川県と合同の調査を実施したほか、関東地区及び北海道について防疫所所在地周辺の調査を行ったが発見は横浜市内の2個所に限られており、採集された頭数は90頭のみである。本虫は、我が国においてもそれほど重要な害虫になりえないと推測されるが、防疫所としては一応発生動向に注意している。

ヒラヤマナガメゾウムシ

学名 *Aclees hirayamai* Kōno

東京都八丈島において、従来発生を見ていなかったヒラヤマナガメゾウムシが異常発生し、イチジク、ゴムノキに対する被害が問題となっている。

今年度、都八丈島病害虫防除所が調査したところによれば、ゴムノキの栽培面積10ha全てに発生が及んでいることが明らかとなった。

本虫は、鹿児島県のトカラ列島、沖縄、台湾に分布しており、これらの地域では、農作物に対する被害が問題となったことはなく、今回のような被害例は極めて珍しいことである。

八丈島では、成虫が5月下旬から10月にかけて発生し、ゴムノキの取木部分や鉢上げ用に切除した切り口に好んで産卵する。ふ化した幼虫は枝や樹幹に食入し、食害が進むと逐には枯死する。

ニセタマナヤガ

学名 *Peridroma saucia*(Hübner)

英名 Variegated cutworm

日本蛾類学会発行の「蛾類通信」No.94に掲載された大和田守氏の報告「*Peridroma saucia*

(Hübner)ニセタマナヤガ(新称)の発見」によると、大阪府内で1976年夏(泉佐野市)と1977年1月(大阪市)の2回、東アジアでは未記録であったニセタマナヤガ(新称)が採集された。

本種は、世界的に分布しており南北アメリカでは、しばしば大発生し害虫となることがあるようである。幼虫は多食性でハワイにおいては、キャベツ、ジャガイモ、トマト、チョウセンアサガオ類、オナモミ類、ノゲシ類、スベリヒユ類、オレンジ、トウモロコシ、サトウキビなど主として草本を食害するようである。

ジャガイモ黒あし病

学名 *Erwinia carotovora* var. *carotovora*(Jones)Dye*Erwinia carotovora* var. *atroseptica*(van Hall)Dye

英名 Blackleg

黒あし病は読んで字のごとく、あし(地際部付近)の部分が黒〜黒褐色に犯される病気である。

病徴は萌芽と同時に認められ、その後まもなく下葉から黄変し、葉は上向きに巻く。草丈は、伸長が停滞枯れて直立するが後に倒伏することが多い。

茎は地際部が黒変し、茎の内部は維管束部が褐変する。早い時期に発病したものは枯死して欠株となるが、遅れて発病したものは輪腐病のように1〜2本枯れとなる場合が多い。

本病は世界各国に広く発生が認められているが我が国での発生は、昭和30年頃北海道の中標津町で類似症状株を認めたのが最初でありその後種いもの移動とともに発生地域が拡大していった。

現在、北海道での発生は7支庁、42町村におよび最近群馬県でも発生が確認された。

伝染は、塊茎伝染と切断刀による接触伝染が知られており、土壌伝染については可能性が低いようである。また、種いもの貯蔵状態によって発病が左右されるという報告もある。

被害は、病株率が1%の場合に10a当り約20kg程度の減収といわれるが、種子更新が適当に行われる限りさした問題はないようである。

本病害を植物防疫法に基づく種馬鈴しょ検査の対象病害とするかどうかは、ここ数年間にわたって実施した試験結果及び発生地の実態調査に基づき、近く結論が出される予定である。

さとうきび黒穂病

学名 *Ustilago scitaminea*(Rabenhorst)Sydow

英名 Smut

さとうきび黒穂病は、世界のさとうきび生産地で最大の病害として恐れられており、我が国でも昭和17年頃まで沖縄県で発生が記録されていたが、品種の切換えによりその後発生がとだえていた。47年に沖縄県の宮古島で発生が再確認されたのを契機に急速にまん延し、49年には鹿児島県奄美群島の与論島、沖永良部島、徳之島で50年には奄美群島全域と種子島で発生が確認された。54年度の発生面積は、県及び防疫所の調査で、50市町村、8,255haと報告されている。

本病に罹病した株は、茎葉がそう生して小さくなり、葉身はせまく節間は長く、茎の先端部から鞭状物(太さ鉛筆大、長さ25〜50cm、黒色)がでる。この鞭状物から飛散する多数の厚膜胞子によって伝播する。本病に感染すると、早いもので数週間、遅いものでも数か月で発病する。罹病茎は、健全茎に比べ重量、ブrix値(糖度)が大巾に低下する。

本病の防除には、51年度から国の補助金が支出され植物防疫所も防除効果確認に協力しているが、罹病株の掘り取り焼却、株出栽培回数短縮、抵抗性品種の導入という耕種的な防除以外、効果的な防除方法が確立されていないため、完全制圧という目標は果されていない。